

## Ⅱ 病弱教育部

### 1 病弱教育部の概要

「学校で学びながら病気を治したい」という児童生徒の願いに応えて、病弱教育部では隣接の独立行政法人国立病院機構南京都病院と連携し、困難に負けない強い心と体を持ち、明るく豊かに生き抜く児童生徒を育てる教育を行っている。

転入児童生徒の病種は、昭和 61 年の開校当時は 8 割が喘息であったが、平成 4 年に隣接の病院に肥満外来が開設されてからは肥満症が増えている。また最近の傾向として、発達障害を併せ有していたり、不登校傾向により基本的な学習習慣や該当学年の学習内容が身につけていなかったり等、対人関係や学習面での課題のあるケースが多くなっている。

#### (1) 指導目標

豊かな心とたくましく生きる力を育てる	
— 自信を持たせる指導の充実 —	
(1)	生涯を通じて病状に留意して生活する力を育てる。
(2)	自主性や創造性を育てる。
(3)	豊かな人間関係を育てる。
(4)	自主的に学習する力を育てる。

#### (2) 教育課程

教育課程表

教科・領域		教 科									道徳	特別活動	総合的な学習の時間	自立活動	週合計時間数
学部	学年	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育					
小学部	1	8	-	4	-	3	2	2	-	2	1	1	-	2	25
	2	8	-	5	-	3	2	2	-	2	1	1	-	2	26
	3	7	2	5	2	-	1.5	1.5	-	2	1	1	2	2	27
	4	7	2.5	5	2.5	-	1.5	1.5	-	2	1	1	2	2	28
	5	5.5	2.5	4.5	2.5	-	1.5	1.5	2	2	1	1	2	2	28
	6	5	3	4.5	2.5	-	1.5	1.5	2	2	1	1	2	2	28

教科・領域		教 科									道徳	選択	特別活動	総合的な学習の時間	自立活動	週合計時間数
学部	学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	英語						
中学部	1	4	3	3	3	1.3	1.3	2.4	2	3	1	1	1	2	2	30
	2	3	3	3	3	1.3	1.3	2.4	2	3	1	2	1	2	2	30
	3	3	3	3	3	1.3	1.3	2.4	1	3	1	3	1	2	2	30

## ア 教育課程表について

小学校・中学校の教育目標と同一の目標を持つ本教育部の教育課程は、小学校・中学校の教育課程を編成している。児童生徒の実態に応じた適切な教育課程を組むこともある。

自立活動を週当たり2時間とし、内1時間は朝の活動の時間（15分間）を週3回設定している。中学部の選択教科は情操教育の重視の観点から2年で音楽・美術の選択、3年で美術・音楽、国語・社会・数学・理科の選択としている。

## イ 校時

1単位時間は隣接の医療機関における日課等の関係から小・中学部ともに45分としている。

8:35	8:50	9:00	9:55	10:50	11:45	12:30	13:15	13:35	14:30	15:15	15:30	16:00
自立活動	朝学活	1校時	2校時	3校時	4校時	昼食休憩	健診 康察 観察	5校時	6校時	清終 掃学 活	補 充 学 習	

## 2 研究テーマと取組内容

### (1) 研究テーマとテーマ設定理由

#### ア 研究テーマ

「自ら学ぶ態度を育てる授業改善の取組」～自分の思いを自分の言葉で表現する力を～

#### イ テーマ設定理由

最近の病弱教育部では、喘息等の病気の治療のためというよりも、心因的な課題を抱え、様々な要因で、学校に気持ちが向かず、学習に対しても意義を見いだせず、基礎的な学力が身に付いていない児童生徒が多くなっている。中には該当学年の内容を学習するための復習にかなりの時間を費やすことが必要な児童生徒もいる。そのような児童生徒達は、語彙が少なく、自分の気持ちをどのように表現してよいのか分からず、「いや」「無理」の単語ですべてを片づけようとしたり、それも言えずに黙ったままだったりすることが多い。

このような児童生徒が、自ら学ぶためには、まず自分の学びたいという思いを表出せねばならず、そのためには、思いを表出するための基盤となる言語に関する力（語彙力、文章力）を高めることが必須である。さらに、自分の思いを自分の言葉で表現する力を向上させていくためには、語彙力、文章力だけでなく、それを操る土台となる精神的基盤を太らせること、すなわち精神的安定や様々な経験なども重要な要素となる。

それらを踏まえ、入院加療という制約のある中ではあるが、教科指導、自立活動、特別活動等々、多方面からの取組を進めることで、「〇〇がわからない」「〇〇を教えてほしい」と自分の思いを自分の言葉で表現し、自ら学び、たくましく生き抜く児童生徒を育成したいと考えた。

## (2) 研究活動の概要

### ア 各教科・・・中学部の実践例参照

病弱教育部では個々の生徒の実態が異なるため、アセスメント票をもとに共通理解をし、さらに教科毎に各生徒の状態や状況を把握し、個別の指導計画を立て、早い段階で手立てを考えるようにしてきた。基礎学力が十分身に付いていない場合については、小学部会・中学部会で話し合い、授業内で補っていけるように対策を考え、さらに放課後の補充学習を利用した学習支援も必要に応じて行った。

授業では、国語の授業だけでなく、全教科において、話す、書くという活動を多く取り入れるとともに、授業の流れに変化をつけ、集中力を高めるようにした。また、児童生徒の変化をいち早く感じ取れるように普段の児童生徒の様子に気を配りながら、学習内容が定着しているかどうかを把握しておくようにした。

研修会では、公開授業や研究授業、児童生徒による授業アンケート等に取り組んだ。また、自分の思いを自分の言葉で表現する力を高めるための具体的な取組内容について、教科毎に書き出し、確認した。さらに、各教科で、実際に指導案を作り、具体例をあげながら個に応じた指導の手立てと工夫の交流も行った。授業の組み立て方のヒントや発想の転換など、即実践に役立つ交流ができた。

### イ 特別活動・総合的な学習等・・・小学部の実践例参照

児童生徒が主体となって取り組む活動を多く設定し、事前の指導も丁寧に行い、当日は児童生徒が自信を持って活動できるようにした。今年度は、合同朝の会にインタビューコーナーを取り入れて、児童生徒が自由に話せる場を設定した。

### ウ 自立活動・・・自立活動の実践例参照

近年、自立活動の時間に、個別活動の他に小学部・中学部合同での集団活動を取り入れるようにしてきた。とりわけ、この2年間はエンカウンターを定期的に実施したことで、大きな成果が得られた。

## (3) 実践例

### ア 小学部の実践例・・・自分の思いを表現することを大切にした取組

(総合的な学習の時間を中心に)

#### (ア) 児童の実態

2学期、小学部は、A、B、C、3名の在籍であった。

Aは、人なつっこい笑顔で話してくれることが多く、おしゃべり好き。興味や関心のあることにはいっぱい話をしようとし、イメージはしているのだが、適切な言葉を用いて表現し、伝えることが苦手である。知ってはいるけれど、そのことをうまく説明できず、的確に述べるのが苦手である。言葉足らずの会話になることが多く、言語の理解の弱さがある。また、学習全般にできない感が強く、「わからない・できない」ことで、自己肯定感も低下している。

Bは、病気のため、前学年まで各学年20日から40日の欠席があった。学習の積み上げが難しく、学力が定着しにくい傾向がある。語彙が少なく、学習だけでなく日常会話の中でもわからない言葉があり、話が通じていないこともある。そのため、おしゃべりはできても、相手に何か伝えようとする、どう話してよいかわからないときがある。また、みんなの前で発表したり、自分一人で行動したりするには、自信がなく、抵抗もある。

Cは、3年3学期より欠席が多かった。素直で優しい性格であり、好きなことや自信のあることに対しては意欲的に取り組める。不安感・緊張感が日常的に高いと思われ、特に対人関係における不安や緊張が強い。母親に依存しており、困っていることを母親に話し、頼って解決しようとする。自分に余裕のないときは、相手の気持ちを考えることや、自己を振り返って気持ちを整理することができなくなってしまう。困っていることを伝えることができず、黙りこんだり、声をあげて泣いたりすることもある。また、被害者意識が強く、他者を言葉で攻撃することもある。文章を書くことに対して抵抗感を持っている。

### (イ) 日々の取組

自分の思いを自分の言葉で表現できるように、必要なことを相手に伝えることができるようになるために、まず、自分の不安や苛立ちを聞いてもらえるという安心感を持ち、困っていることを安心して話せる担任との信頼関係作りを大切にした。

また、相手の反応を見ながら会話し、適切な言葉にして返し、表現の仕方を下記のようなポイントで伝えた。

- ・多くのことを相手に伝えたいことがあるときは、会話のきっかけをつくるために、自分の意図が伝わるような短い文章を考える。
- ・話そうとする要点は何かをはっきりさせておく。
- ・最低1回は、教室で練習する。

わからない言葉や事柄については、辞典や図鑑で調べたり、実物を見たり、体験したりできるように配慮した。

合同朝の会や小学部の中で発表し合う場を計画的に設定した。発表原稿を一緒に考え、練習やリハーサルを行うことで、見通しを持って発表できるようにした。

また、さらに、詩や俳句作り、行事の後の感想文、作文など、児童の実態に合わせて表現方法を工夫し、自分自身を振り返り、気持ちや思いを文章で表現する取組を継続して行った。

### (ウ) 和太鼓の取組（学習発表会で演奏）

#### a 和太鼓を通して子どもたちに求めるもの

- ・技術のみでなく、その子の内からあふれ出てくるものがあること
- ・それぞれの個性（個人やチーム）が光ること

そのためには、子ども一人一人がチームの中で主人公になっていくこと、互いを支え合える集団が作られていくことに留意しながら指導していくことが大切である。

#### b 和太鼓に対する児童の反応

2人は、ゲーム等で太鼓をたたいた経験があり、和太鼓に取り組むことには抵抗がなかった。他の1人については、経験はなかったが、ビデオを見て意欲的に取り組もうとしていた。

### c 個人の表現から集団の表現への変化の中で

#### (a) 龍神太鼓に込められているもの

今回取り組んだのは、龍神太鼓で、雨乞いの太鼓である。

昔、農民たちは、梅雨や夏に雨が不足したとき自然の脅威を感じながら作物の豊作を祈願し、雨乞いの太鼓を打ち鳴らしたといわれている。だから、太鼓のバチは、天に向かって自分の思いが通じるようにまっすぐに伸ばす、また、自分の祈りだけでは通じないので、次の人に思いを込めてつなぐ等の話をした。

Cはその意味をしっかりと理解した。このことが後の集団としての自分たちの太鼓につながっていくことになる。

#### (b) まずは、思いっきり打つことから

和太鼓は、「力一杯打てる、大きな音がしておもしろい、簡単」など誰もが取り組みやすく魅力いっぱいの楽器である。

龍神太鼓は、1番手から3番手まであり、それぞれ違うリズムを打つ場合と同じリズムと一緒に打つ場合がある。一緒に打つ部分（基本のリズム1・2）は最後の部分であるが太鼓に慣れる意味もあって、初めに指導することにした。

注意点としては、

- ・バチの先を見る
- ・腰を落とす

の2点である。後は、教師のリズムを真似ながら思いっきり打たせることを心がけた。腕が曲がったり力が入り過ぎたりしていたが、『太鼓を打つことは楽しい』という思いを大切に指導した。



#### (c) 教室で自分のリズムを自主練習

基本のリズムは簡単なリズムであることから、思い切り打っても間違えることもなく、気持ちよく打てたことがさらなる意欲につながっていったようだ。楽譜を見せ、個人分担を決めると、自分の教室に楽譜を持って帰って練習するようになった。初めのうちは、楽譜を見て打っていたが、Cは早く覚えてしまった。この時点でもう一度龍神太鼓のビデオを見たいという気持ちをもっていたため、『太鼓をかつこよく打つためにはどうしたらよいだろう』ということ自分たちのビデオを見て考える時間を取った。真剣にビデオを見て自分たちの姿をチェックし、直すところを確認していた。また、龍神太鼓のビデオを見て、良いと思える部分は自分の中に取り入れることができた。

#### (d) 自分だけの龍神太鼓から3人の龍神太鼓へ

毎回の集団練習の後に、演奏を振り返り、話し合う機会を設定した。

Aは、納得のいく演奏ができたときは「まあまあ。」などの曖昧な表現をすることが多かった。失敗した時は落ち込んでしまい言葉が出ない。そこで、教師が「バッチリやった？あかんかった？」と選択して答えられるように質問すると、「あかん。」と思いを伝

えられた。Bは「よかった。」「～を間違えた。」などの感想が多かったが、「もう一回練習したい。」という思いを伝えることもできた。Cは、3人のタイミングやリズムの合わせ方についての意見を言うことができた。

教師は、児童一人ひとりの意見が、他の児童にも受け止められるように言葉を補う配慮をした。また、小さな気づきも見逃さずに褒めて自信を持てるようにした。

さらに、模範ビデオや自分たちの練習時の映像を活用し、よりよい演奏にするために話し合いを持った。

Aは、「こんなふうにしていた。」と身振り手振りを交えながら一生懸命に説明していた。教師がAの気持ちと話す順序を整理すると「入れ替わりの時、素早く移動した方がいい。」とみんなに伝えることができた。また、Bは「よそ見をしていた。」と反省し、Cは「思っていたより動きが小さかった。」等、様々な意見を出し合うことができた。それらを自分たちの課題として共通理解し、次の練習に生かすこともできた。

集団練習が進むにつれ、演奏中に自分達同士で合図しあったり、間違った時に励ますように顔を見合わせたりするようになった。3人のチームワークが良くなり、Cの気持ちの入った力強い表現は他の2人の良い見本となった。そして、体をいっぱいを使って演奏し、誰が欠けてもできない3人の龍神太鼓へと仕上がっていった。



学習発表会での「龍神太鼓」の舞台発表

(e) 児童の作文・詩 (学習発表会后、各学級で詩や作文に取り組んだもの)

龍神太鼓

A

トントト、トントト  
 いよいよ本番だ  
 ウン、ドドドン ウン、ドドドン  
 きんちようせずに、うまくはいれた  
 ドンドンカッカ ドンドンカッカ  
 客席が見えた  
 人がいっぱいだった

ドド、ウン ドド、ウン ドド、ウン  
 ドド、ウン ドド、ウン  
 ドドンガドン ソーレ  
 速すぎやー

ドドドドドドドドドドドド  
 ドドンガドン  
 速すぎたけれど、力いっぱいたたいたぞ  
 ヤッー  
 終わったー

龍神は、雨を降らせてくれたぞ

龍神は、雨を降らせてくれたぞ

「楽しかった龍神太鼓」 B

(略) 幕がゆっくり上がりました。少しこわかったです。一回目のリズムの時、恥ずかしいな、と思いました。2回目のリズムの時は、だんだん楽しくなってきました。和太鼓をたたくのが速くなってきました。Cの3番目のリズムがかっこよかったです。Cは、リーダーで「ここはもうちょっと、こうの方がいい」とアドバイスをくれて、太鼓がたたきやすかったです。私も四番のリズムをがんばろうと思いました。Aもはく力ができました。今までにない力強い太鼓がたたけたと思います。

太鼓をたたいたことで、3人が、がんばれたと思います。私は、学習発表会で龍神太鼓ができて嬉しいです。(略) みんなと協力すれば、むずかしいことでも、できると思いました。

学習発表会を終えて」 C

学習発表会が終わり、ぼくは少しさびしい気持ちになりました。学習発表会の前は毎日練習がありました。練習はしんどいけど、リズムを覚えてたたくのは、楽しいと思っていたのかもしれない。

学習発表会の自分の出番の前は、とても楽しみという気持ちでいっぱいでした。緊張もあったけれど、衣装を着て出番を待っているときの気持ちは、今までに(記憶上)感じたことのない楽しい気持ちだったと思います。太鼓をたたいているときも、とても楽しくて、乱打のところぐらいになると「もうすぐ終わるなあ」という思いで最後までたたきました。

(ウ) 成果と課題

取組当初から太鼓に対しては興味を持っていたが、取組が進むにつれ、「太鼓をたたくのが楽しい。気持ちがいい。」と太鼓をたたく楽しさを子ども達自身が感じる事ができた。さらに、学習発表会が近づくにつれて、「太鼓をたたけるのも後少しや。」「発表が終わってしまって、さびしい。」とさびしさを感じ、発表後も「太鼓が楽しい。みんなでたたくのは楽しい。もっとたたきたい。」という気持ちをもてるようになった。

練習を始めた頃は自分がたたくことだけを楽しんでいたが、お互いのたたき方や姿を見て、よりかっこよく力強いたたき方をしよう意識できるようになった。

演奏やビデオを見た後の話し合いでは、全員がそれぞれの言葉で素直な気持ちを表現し、効果的にフィードバックすることができた。取組が進むにつれてチームワークがよくなり、そのなかで3人の児童は安心して自分の思いを表現することができた。

学習発表会の週に全員で練習できない期間があったのだが、「Bがいないとタイミング

が違う。」「B、来られるかなあ。」と友達のことを思う言動が見られた。発表当日にやっと3人が揃い、「Bが来てくれて、3人で太鼓をたたけるのがうれしい。」「来てくれてありがとう。」と、とても嬉しそうな表情で本番を迎えることができた。

事後の取組では、当日のビデオを見、小学部の目標、自分の目標、自分が頑張ったことを振り返ると共に、友達の頑張った点などを認めることができ、お互いに発表し合うことができた。また、各クラスで作文や詩などに取り組み、自分の言葉で振り返り、表現することができた。語彙の乏しさ、言葉での表現力の未熟さなどの課題は残っている。しかし、仲間と一緒に作り上げていく楽しさを味わうことが原動力となり、自分の思いをよりわかりやすく表現しようとする態度がみられるようになってきたのは大きな成果である。

## イ 中学部の実践例・・・英語の授業より

### (ア) 中学部の実態を踏まえたテーマへのアプローチ

病気の治療のためだけでなく、心因的な課題等を抱えて転入してきている中学部の生徒の実態を踏まえると、「自ら学ぶ態度を育てる」ための授業を実践していくためには、「言語の力」を高めることが重要であり、とりわけ基礎学力の育成が必要であると考え。基礎的な学習に重点を置くことにより、学習意欲を高め、さらには自ら学ぶ生徒を育てることに結びついていくものだと考える。

また、学校生活全般を通して、生徒と教師の会話を多く取り入れ、言語力向上のきっかけを作ることも必要である。自分の思いを素直に語ることができる関係作りや環境作りも、自ら学ぶ態度を育てるための効果的なアプローチに向けて、大切な視点であると考え。

### (イ) 英語の授業を通じた具体的アプローチ

英語の学習の目的に、コミュニケーション力の育成があるが、その力を付けていくためにも、授業を通して、言語に関する力の重要な要素である基本的な知識、技能を向上させるという視点をもつことが重要である。つまり、生徒が自主的に英語の単語や英語文を発音する姿勢や、学習した英語を用いて自ら英語を話そうとする姿勢を身に付けることがコミュニケーション力に繋がっていくことだと考えるからである。そのためには、単語や英語文を書いたり、聞いたりする活動を多く持ち、言語の働きや仕組みを理解するための練習問題に取り組むなどの基礎学習に視点をあて、進めていくことが重要である。「いかに興味を持って学習に向かえるか」「意欲的に英語学習に取り組むことができるか」を英語科のテーマとし、基礎基本の充実を図るために、毎時間、英語に興味を持てるような教材や、分かりやすく取り組みやすい授業の工夫を行っている。

#### a 授業において

パターン化し、生徒が毎回の授業に見通しを持てるような授業計画を立てる。導入、展開、まとめのメリハリをつけたり、授業で毎回小テストを実施し語彙力を高めたり、聞き取りやコミュニケーションの時間を設定したりするなど、意欲的に英語学習に取り組めるよう、様々な観点からの授業案の工夫が必要である。

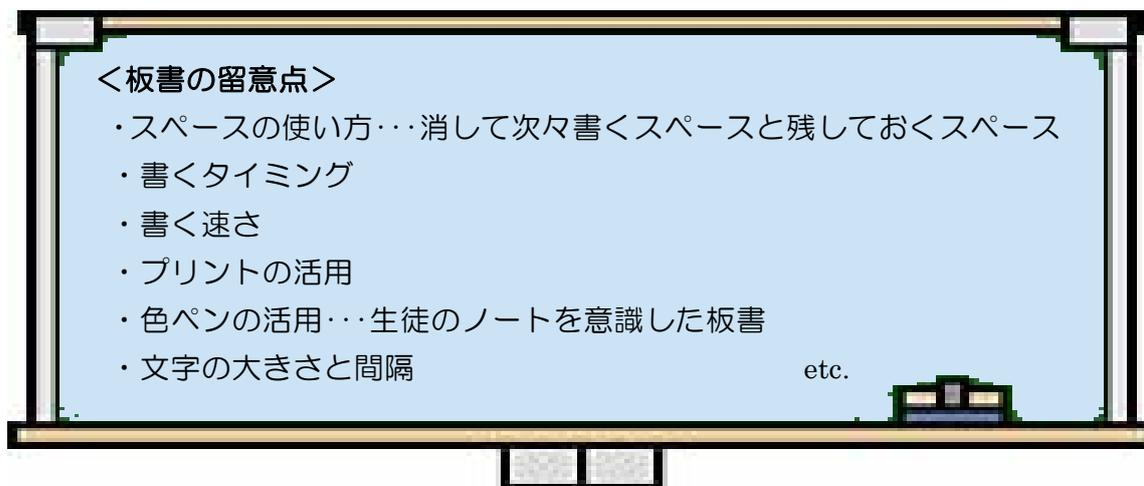
例えば、英語の発音練習は回数をできるだけ多く持つようにし、新出単語の発音を最初はゆっくりし、徐々に発音の速さを上げていき、苦手な生徒にも自分で発音できるよ

うな手立てを考える。また、学年が上がるにつれて教科書の文字が細くなると、苦手意識がさらに大きくなるので、英文を読むときに定規などを使って行の確認をしたり、指で押さえて読んでいったりするなど、文字に対する混乱を少なくする工夫が必要である。

## b 板書の工夫

授業の流れをもとにして、構造的な板書計画を行うことが大切である。例えば、単語、英文のスペースを考えながら書く場所を決めたり、消して次から次へと書いていくスペースと、残しておくスペースを決めたりしながら、板書していくことが重要である。

また、指導者が書くタイミングと書く速さも大切である。生徒が授業にのっているときに書くことが多くなると、学習意欲が途切れることがある。生徒に対して長い時間、背を向けて板書をする、生徒の様子もつかみにくく、状況によってはマイナスの雰囲気を作る危険性がある。板書内容が多いときはプリントを事前に準備したり、生徒が練習や作業しているときに、板書を行ったりする。色ペン（ホワイトボード用）を使ったり、重要語句の色を変えて書いたりするなど生徒が書くノートの見本を意識した板書計画もより有効であり、自主的に学習したいと感じる要因になる。さらに、文字をとらえることが苦手な生徒には、アルファベットの文字の大きさを大きくし、間隔を開けて板書すると理解しやすい。



## c 効果的な発問

生徒の思考を促す発問を準備しておく。それぞれの実態に合わせて理解しやすく、答えやすい質問を用意する。指導者側が説明しすぎて発問の答えを先取りしてしまったり、生徒が何を答えて良いかわからない発問をしたりしないように気を付ける。発問内容を事前に考えて発問計画を立てることは授業をスムーズに進める上では有効であるが、生徒の発言、発表等に対して臨機応変に会話を進めていくことも「自分の思いを自分の言葉で表現する力」を高めるには良い方法であると思われる。

#### d 教材の工夫

英語の授業の初めに、いつも英語の歌を聞く時間を設けている。

授業に英語の歌を取り入れることは、英語が苦手な生徒にも興味を持って学習に取り組むきっかけ作りになる。月毎に英語の歌を選曲し、曲紹介の時に、既習単語や英文を抜き出して確認し、サビの部分の歌詞を読んで興味付けを行う。初めて聞く曲もあれば、テレビでおなじみの曲もあり、反応は様々であるが、英語の歌詞を指で指しながら聞き続けていくと、フレーズで覚えていたり、口ずさんだりする生徒も出てくる。また、英語の授業が始まるという意識付けになり、授業に向かう姿勢がスムーズになる。月の終わりには歌詞の中にある既習単語を、歌を聞きながら書き取るテストも行くと、基礎学力の定着にもつながってくる。

また、基本事項を学習する時や、会話練習などでは、親しみやすいキャラクターを用いたり、指導者が絵を描いたりして説明するなどの方法は、発達障害への支援としても、有効である。視聴覚教材を用いた授業構成は生徒に興味を持たせ、意欲的に取り組もうとする気持ちを育てる。

#### (ウ) 成果と課題

学習の基礎基本を充実することが、自ら学ぼうとする気持ちを育てるためには大切になってくる。「理解できる」という自信が学習意欲を高める要因だと思われるからである。そのためには、「生徒が興味をもつこと」「学習した成果が目で見えて実感できること」などの具体的な方法で取組を進めていくことが重要である。そういった基礎学習を充実していくことにより、言葉を知り、理解し、それを使って、聞いたり読んだり、話したり書いたりすることができる。そして、このような「言語に関する力」を身に付けることにより、自分の思いを自分の言葉で表現できるようになるものと考えられる。言葉である英語の学習は、まさしくそのための中心的な役割を担っている。今後も引き続き、自ら学ぶ態度を育てるための授業改善の取組を進める中で、その役割の一端を果たしていきたい。

#### ウ 自立活動の実践例

昨年度はショート自立の時間（15分間）に、今年度はロング自立の時間（45分間）に、月1～2回エンカウンターを行った。

ここで行ったエンカウンターは、構成的（グループ）エンカウンターであり、与えられた課題をグループで行う「エクササイズ」とエクササイズ後にグループ内でそれぞれ感じたこと、考えたことを互いに言い合う「シェアリング」で構成されるものである。

最近の在籍生の特徴として、コミュニケーションの力が弱く、そのことが原因で人間関係がうまくいかず、不登校に陥った児童生徒も多い。

人から言われて嫌だった言葉、傷ついた言葉はすぐに言えるが、褒められたり、嬉しかったりした言葉は思い浮かばないなど、過去に周囲から温かい言葉をかけられた経験が少ないことがうかがえる。そのため、自分も他者に適切な言葉が使えずに人間関係を損ねてきたことが多いのではないかとと思われる。

相手の気持ちを考えることや、自己を客観的に見つめ、気持ちを整理し、言葉で表現する力を高めることで、集団の中で適応していく基礎を培うことや心の安定をねらいとして、エンカウンターを行うことにした。

## (ア) エクササイズ

下記の表のようなエクササイズを実施した。実施後、毎時間「シェアリング」をして、活動をした後の自分の気持ちや相手への思いを言葉にする時間をとった。

エクササイズ	ねらい	内 容
目は心の窓	非言語でのコミュニケーションについて考える。	紙に書かれている感情（喜び・悲しみ・怒り・驚き）を顔の表情で次の人に伝える。
お隣の人紹介	言葉で友達のいいところ、好きなことを伝える。	円くなって座り、隣の人の良いところ、好きなところを入れて他己紹介する。
自己紹介トス	自分について簡単な言葉で表現して、自己受容や他者理解を促す。	ふかふかのかわいいぬいぐるみを回しながら、自分について紹介する
連想イメージ ゲーム	人には、いろいろな感じ方があり、感じたことを文字にして表すことによって、自己主張ができる。	題（例・果物、春の花）に対して思い浮かんだもの・言葉を書く。
ハンドパワー I	簡単なスキンシップを通して他者に対して支持の気持ちを示す。支持を受けている感覚を体験する。	円になり、友達の肩・背中に手の平を当て、元気の出るメッセージを念じる。
ハンドパワー II	ハンドパワーIに加えて、相手に質問したり、感謝の気持ちを伝えたりする。	やさしく、手を動かす。相手にどうして欲しいか質問する。された人はお礼を言う。
いいところ みつけたよ	友達のいいところを考え、文章に書いて伝えることで、信頼関係を深める。	友達のいいところ、頑張っているなど思うことをメッセージカードに書き、お互いにカードを読み合う。
ふわふわ言葉 チクチク言葉	周りからの思いやりのない言葉で傷つくことは多いので、ふわふわ言葉、チクチク言葉に分けて振り返ることで、言葉が引き起こす感情に気づく。 温かい言葉を進んで使う肯定的な人間関係を育てる。	普段自分たちが使っている言葉について、ふわふわ言葉とチクチク言葉に分けて振り返る。
人間カラー コピー	自分が見た絵を、色や形、イメージを相手に言葉で伝える。 グループで協力をして一つの作業をする。	別の場所に貼ってある絵を見て覚え、グループの人にどんな絵かを伝える。 みんなで協力して絵をそっくりに完成させる。
あなたなら どうする？	自分の気持ちを上手に伝えるための言葉の使い方についてロールプレイを通して考える。	人からの誘いを断る、気持ちをうまく伝える為の場面を設定してロールプレイをする。色々な言葉を言われた時の気持ちをシェアリングして、人とうまくつき合うための言葉を考える。

## (イ) シェアリング（振り返り、分かち合い）の意義

（『エンカウンターで学校が変わる ショートエクササイズ集』

監修 國分康孝 図書文化社 より）

- a 同じエクササイズをしても人によって受け取り方、感じ方が様々違うことを知る機会になり、複眼的思考を身につけ、他者を理解するのに役立つ。
- b 自分の気づいたこと、感じたこと、考えたことを言葉で表現することにより、ぼんやりしていた自己概念を明確にし、自己理解に役立つ。
- c 自分と同じような気づき、感情、思考をもった友達存在を知り、励まされ、共感的理解を得る機会となる。
- d 人前で自分の気づいたこと、感じたことを発言することにより、言いたいことが言える自己表現力が得られ、自己主張訓練になる。
- e 友達と自分の間に起こったことやエクササイズを通して体験したことの意味を、言葉にして理解することにより、体験的理解を得る機会となる。

## (ウ) 児童生徒の様子

エンカウンター時間の名前は児童生徒達が意見を出し合って「4時間目だよ！全員集合」と決めた。エクササイズは、精神的な負担が少なく参加できると考えたものから始めた。指導する教師の人数も少なくしてゆったりした雰囲気になるように心がけた。

5月までの1学期前半は、自分のことを他者から誉められるエクササイズを中心に実施した。

1回目の「お隣の人紹介」では、楽しくゲームができて、人から誉められることも人の良いところを聞くことも心地よいと感じられた児童生徒が多く、穏やかな時間を過ごせた。

「他者の良いところを見つけ、メッセージカードに書く」では、小学生は良いところを時間内で考えて書けた。中学生はふだん仲良くしていても、改めて相手の良いところを文章にするのには時間のかかる生徒が多かった。

「ふわふわ言葉、チクチク言葉」でも、チクチク言葉（人から言われて嫌だった言葉、傷ついた言葉）はすぐに出てくるが、ふわふわ言葉（誉め言葉、嬉しかった言葉）はなかなか出てこない児童生徒が多かった。温かい言葉をかけられて嬉しくなったり、気持ちが和らいだりした経験が少ないことを改めて感じさせられた。そんな児童生徒も、みんなからのメッセージカードをもらい、いい表情で見ている。小学生は素直に「うれしい。」と気持ちを表現していた。人から認められることで、気持ちが豊かになり優しい態度がとれることを実感したようだった。

「ハンドパワーの輪」では、他者からスキンシップをしてもらうことは、体だけでなく、気持ちもリラックスすることを実感できた。その時の気持ちを「寝たいくらい気持ちいい。」「理由は分からないけど、いい気持ち。」「ありがとう。」等の言葉で表現していた。



## (エ) 成果と課題

これまでのエンカウターの取組は、児童生徒達にも好評で、楽しんで時間を過ごしている。自分が認められ、安心して活動できる経験は、心の安定に繋がっている。

ゲーム的なエンカウターの時はどの児童生徒も意欲的に参加できる。しかし内側を見つめるような時は、指導の意図を絞って児童生徒の状態に配慮をしながら進めないと、自己表現が苦手な児童生徒にとっては、何をどう表現していいか分からず指導効果が得られないこともある。児童生徒の反応を予想し、必要な助言や配慮を考えておかないといけない。教師は普段から児童生徒達の実態を的確に把握しておく必要がある。

今後、自分の気持ちや相手への思いを言葉にして相手に伝える内容を取り入れていく予定である。また、引き続き、心の安定をはかれるような内容にも取り組みたい。

## (4) まとめ

上記のように、「自分の思いを自分の言葉で表現する力」に焦点を当てながら、教科・領域を越えてさまざまな角度から取り組んだ2年間であった。

転入当初、何を聞いても「いや、べつに。」「わからん。」としか言わなかった生徒達が、転入後1～2ヶ月たつと、「〇〇だから、・・・がしたい。」としっかり自己主張したり、「□□さんがしんどいみたいだから、ぼくが代わるわ。」とクラスメイトのことを気遣って行動したりするようになった。また、学習に於いても、「わかった！ これ、おもしろいな。」と目を輝かせ、自分から「今日の宿題は？ 次のページもやってきてもいいか？」と意欲的な姿を見せた。これは、我々が取り組んできたことの大きな成果である。しかし、「勉強、きらいや。けど、高校には行きたい。」との思いで、葛藤し、行事での頑張りを学習面でなかなか発揮できない生徒もいた。半年や1年で身につく力ではなく、6年間、3年間の積み上げが大切であることも痛感させられた。

病弱教育部に在籍する児童生徒達は、病気の治療だけでなく、学習の積み上げやさまざまな経験をし、自己肯定感を高めることが大切である。

少ない人数の中で、ゆったりと自分や友だちと向き合い、エネルギーを貯める。その中で人間関係の結び方や学習の仕方を身に付け、自分に自信が持てたとき、次への一步を踏み出し、前籍校へ、高校へと巣立っていく。本校在籍中に、どんなエネルギーを充電するのか、どのように充電するのか、充電したエネルギーをどう活用するのか、我々指導者がしっかりと見据え、計画・実施・検証のサイクルを今後もきちんと行わねばならない。

転出後、スムーズに学校生活が送れる児童生徒もいれば、休み休みそれでもなんとか前進しようとしている児童生徒もいる。エネルギーの充電はここにいる間だけでなく、ずっと必要なのである。そのためにも、家庭や学校、地域諸機関との連携は不可欠である。

病弱教育部の特徴である少人数での授業は、個に応じた指導を進める上で大変有効である。「言語力の向上」「感動・発見のある授業づくり」「個に応じたステップアップ」を合い言葉に、今後も児童生徒の実態に即して進めていくことが肝要である。また、並行して、出口を見通し、大きな集団にも適応できる指導も進めなくてはならない。